

1. 開催年月日：令和7年5月13日(火) 15時～
2. 開催方式：対面、web会議ツールにて実施
3. 委員(順不同・敬称略)

出席：鈴木 嘉一・宮崎 美紀子・尾形 敏朗・山川 鉄郎・倉田真由美・馬場康夫  
web会議ツールにて出席：砂川 浩慶・神田 由築

#### 放送事業者

代表取締役社長：石原 隆

専務執行役員：山口 真

常務執行役員：宮川 朋之

編成制作局 局長：小川 英洋

編成制作局：三品 貴志（編成部）、秋永全徳（制作部）、荒瀬佳孝（制作部）

番審担当：澤 尚志 碓井恭子

web会議ツールにて出席：三瓶 祐毅（編成部）、八巻 洋平（編成部）

#### 4. 議題

- (1) 審議事項：日本映画専門チャンネル『山田太一特別企画 魂に一ワットの光を～2025年・山田太一を語り継ぐ～』
- (2) 報告事項：時代劇専門チャンネル オリジナル時代劇『三屋清左衛門残日録一春を待つころー』

#### 5. 議題（1）

日本のテレビドラマ界に多大なる功績を残し、クリエイターたちに影響を与えた脚本家・山田太一。

2023年11月の死去から1年が経ち、日本映画専門チャンネルでは2024年11月～今年3月まで

【没後1年を偲んで 名優が紡ぐ山田太一の言葉】を集中編成、7本のドラマを放送した。最終月の3月には「青春スケッチブック」を放送。それに合わせ、山田太一から影響を受けた作り手たち（大根仁／清田麻衣子／古沢良太／西川美和／水橋文美江／山崎努）がそれぞれの視点から山田太一ドラマの精神を見つめる特別番組を制作、放送した。

【審議のポイント】 番組、企画について自由闊達な意見を求める。

#### 6. 議題（1）審議内容 ※文中敬称略

- ・テレビっ子の私にとっては大好物のテーマだったからこそ、3点苦言を呈したい。山田太一の代表作「岸辺のアルバム」「ふぞろいの林檎たち」といった傑作TBS作品が放送されない。2番目に、この特番は文字情報が多いわりにテロップ露出時間が短かく、最後まで読めない。読ませる気がないのかと穿ってしまった。3番目は、山田太一を文学者のように扱うのではなく、クリエイターから見た技術論、場面のディテールについての話を深掘りしてほしい。作中で紹介された本を読んだが、宮藤官九郎が事細かに技術的な解説をするあとがきは秀逸だった。次回は時間をかけてでも、同世代の倉本聰や山田洋次からの証言をすべてすくい取るような特集にしてほしい。それくらいの価値がある企画だと思う。
- ・山田太一の脚本作品は「ふぞろいの林檎たち」くらいしか知らない上に、証言者も大根監督と山崎努しか知らないのだから、番組に入り込めなかった。出演者の多くは著名人ではなく、プロのクリエイターだったので、一般視聴者には響きにくいのではないかと。唯一、俳優の山崎努が山田太一をこんな風に語るのかと楽しめた。山田太一は日本が誇る天才脚本家で、ジブリの宮崎駿監督と同じくらい知名度があってもいいはずだ。もっと一般の視聴者に寄せた番組にして欲しかった。
- ・懐かしい気持ちになった。山田太一作品は、弱い人間が何もない日常を生きていたのに、ふとしたことで……、と展開し、つまらない人生がいいねと帰結するドラマだ。一億総中流とされた私たち世代は、山田太一のドラマを見て「ささやかな日常はいいものだ」とじんわり共感できる。しかし、最近は、人間の内面を深く掘り下げたホームドラマは寂しいことにあまり見かけない。その理由は格差の拡大とSNSの普及で分断対立が潜在的に脅威になり、内面を掘り下げていくとつまらない人生はつまらないだけと感じる人が増えたからだろう。編成について提案。本作は特集作品のガイドでもあるのだから、特集初期のタイミングで放送したほうがよいのでは。
- ・脚本家について脚本家が語る人選がよい。大根仁監督が「ホームドラマでは山田太一さんを超えることができない」とコメントし、古沢良太が「山田太一のような論争ドラマがやりたくて、『リーガル・ハイ』につながっている」と告白し、水橋文美江が「私は 트렌디드라마に逃げた」と語る。ただ、みなが同じ結論に達して飽きてしまった。山田太一の晩年取材し続けた清田麻衣子の話は、違う角度で新鮮だった。今回、80年代の作品ばかり取り上げた理由を知りたい。また、震災以降、2時間ドラマも書いていたので、次回は晩年の作品も紹介してほしい。
- ・テレビドラマの歴史を見たようだ。少々乱暴だが、山田太一、倉本聰、向田邦子は日本の近代

文学に例えると、森鷗外、夏目漱石、樋口一葉に例えられるほどの存在だ。しかし、今の若者がそれらの文学作品を読むかという数は限られる。どれだけ山田太一が巨匠であっても、名前は聞いたことがあっても、ドラマは未見の人が多いのでは。リアルタイムでドラマを観た私はディテールのすごさを語りたいが、今回は山田太一入門編として制作してよかったと思う。初期のドラマは映像が現存していないが、今後、アーカイブの重要性が高まるはずだ。TV局も文学全集のように、ドラマの歴史がわかるドラマ脚本全集のような番組を年間通して放送するのはどうか。

- ・山田太一作品の勉強にはなったが、先に指摘があったように、文字情報と映像の関係が悪く、テロップを読んでいるうちに映像が早々と切り替わるのはもったいない。なんのために文字情報を出したのだろう。6名の出演者が異なる役割でコメントしているが、脚本家4人のコメントが似ている。山崎努の経験談が抜きん出てももしろかったので、出演者を絞って構成してもよかったのでは。TBS作品がないのは残念。また番組制作をテレビマンユニオンに発注した経緯を知りたい。
- ・私はほとんど山田太一のテレビドラマを見たことがないので、テレビドラマの歴史という観点で観賞した。番組の範囲ではないが、今後どうこのジャンルを継承するかにも思いを馳せた。戦後、高度経済成長を経て国民が一億総中流となり、普通という最大公約数が掴みやすかった時代は、その時代の魂を捉えやすかっただろう。現代ではどうか。時代の中でも変わらないさやかな日常について、「山田さんでやりきった感がある」と水橋が指摘していたように、今のテレビドラマは山田太一を超えられないのでは。
- ・山田太一が亡くなり、NHKは追悼番組を放送したが、ヒット作を連発したTBSが黙殺状態だったことに怒りを通りこして悲しくなった。日本映画専門チャンネルが「それならばうちがやる」と追悼特集を組んだことをうれしく思う。専門チャンネルの気概を感じた。地上波ではないのだから、幅広い層を意識することはない。闘病生活を終えた直後の山崎努が出演し、貴重な証言をしてくれたのは快挙だ。山田太一作品にはどんな役でも出るのが山崎努と鶴田浩二だった。俳優からも尊敬すべき脚本家だったことが伝わった。出演者の話に合わせて映像をインサートして、話を補強する演出は丁寧でわかりやすい。これからも伊丹十三劇場、高倉健劇場のように、優れたクリエイターの企画に期待している。

これに対して弊社からの回答は以下の通りであった。

- ・今回、映画専門チャンネルらしさを出すために、映画の香りがする俳優が出演する作品を選ん

だところ、1980年代の作品が中心になった。本番組は、山田太一作品をすでに観たことのある視聴者が、番組を通じてより深く作品を味わえるようにという狙いから、特集の最後に編成した。

- ・制作会社テレビマンユニオンとは他番組である人物を深く掘り下げる番組を以前一緒に制作した。また、同じ題材でNHKの番組をテレビマンユニオン別チームが制作しており、社全体から山田太一に対してリスペクトを感じた。自分自身が山田作品をリアルタイムに観たことがなく、後期の作品はDVDで観た。同世代のクリエイターでも山田作品を観ていない、名前すら知らない者がほとんどだ。周りの人間にどう伝えていくかと考えた時に、マニアックな技術論よりも作品のテーマや影響を受けた点などを伺う内容の方が、知らない若い世代に伝わると思い構成した。人選は山田太一について話したいという点に焦点を置き、新鮮味のあるクリエイター中心に人選した。
- ・委員の皆様のご意見を聞きながら、山田太一という脚本家の位置づけや中身のことでなく、この番組自体がどういうポジションなのかを考えた。鈴木委員長の「専門チャンネルなのだから、この企画、番組も専門性が強くて良い」というご発言には勇気づけられた。今の地上波テレビはマニアックな部分には突っ込みづらい傾向があるため、我々、専門チャンネルはファンのためにマニアックな企画や番組も引き続き手掛けていきたい。

## 7. (2) 報告事項

- ・時代劇専門チャンネルオリジナル時代劇『三屋清左衛門残日録－春を待つところ－』について北大路欣也主演、藤沢周平原作の時代劇シリーズ8作目。藤岡真威人、大友花恋の若手ふたりを迎え、テイストの違う作品に仕上がった。三屋に引っかけて3月8日に放送したが、事前にコロナ以降初となるリアル完成披露イベントを行った効果があり、前作を上回る視聴率となった。北大路自身が撮影を前向きに取り組んでおり、現在、次回作の撮影に向けて準備中である。北大路シリーズを生きがいにしている視聴者もいると聞いている。長寿シリーズとして大切に育てていきたい。

## 8. 連絡事項

次回、第94回番組審議会は2025年8月26日(火)、15時から、対面、オンラインのハイブリッドにて開催予定。